

『春雨物語』 「目ひとつの神」の語り

大田 貴 子

一

『春雨物語』は、文化五年（一八〇八）頃に成立した、全十篇からなる上田秋成の読本である。この作品は、江戸時代には刊行されず、写本の形で伝えられてきた。「目ひとつの神」は、『春雨物語』に収められている作品の一つである。

「目ひとつの神」のあらすじを以下に示す。相模の国に住む一人の若者は、田舎者でありながら歌道を志し、よい師を求めて都へと旅立った。その道中、近江の国にある老曾の森で野宿することになった若者は、神人、修験者、狐の女房、狐の童女が、一つ目の神を呼び出す姿を目撃する。彼らはその場で宴を始め、若者も一つ目の神に促されて、おそろおそろの宴に参加した。一つ目の神は、今の都の乱れを嘆き、今のようにならぬ世では都に歌を教えられる者などいないので、故郷に帰ったほうがよいと若者を諭した。一つ目の神の話が終わると、新たに僧が現れ、宴に参加した。そして、若者は僧からも帰郷を促される。夜が明ける頃に宴は終わり、若者は怪異の不思議な力によって、故郷に帰された。

『春雨物語』には複数の自筆本・転写本が存在している。長島弘

明氏「『春雨物語』の自筆本と転写本」^①によれば、現在確認されている『春雨物語』の稿本は、春雨草紙、天理冊子本、天理卷子本、富岡本、文化五年本（桜山文庫本、漆山本、西荘文庫本）、田原本の八本である。このうち、「目ひとつの神」が収録されているのは、春雨草紙、天理冊子本、富岡本、文化五年本である。

各稿本の関係については、長島氏が『上田秋成全集 第八巻』の「解題」^②で、次のように整理している。

中村幸彦・浅野三平・木越治氏をはじめとして、数多くの『春雨物語』諸本研究があるが、諸本の中で『春雨草紙』が最も早く書かれたものであることは、諸家の一致した見解である。また、全体として文章の肉付けが行届いているのは富岡本で、所収各篇が富岡本と全く重ならず、相補う関係にあり、また文字の書き様も、富岡本と類似する天理卷子本は、富岡本のツレとされ、兩本を最終稿本とする説がこれまでの定説となっており、文化五年本は、富岡本・天理卷子本以前の稿であることも、同じく定説となっている。（中略）文化五年本には、底本とした桜山文庫本他に、西荘文庫本・漆山本の二つがある。（中略）この中で桜山文庫本が秋成自筆の文化五年本からの写しで

あり、他二本はいずれも桜山文庫本の写しである。

長島氏が述べている通り、これまでの諸本研究は、最も早く書かれたのは春雨草紙であるという見解で一致している。また、富岡本・天理卷子本を最終稿本とし、文化五年本をそれ以前の稿とするのも定説である。文化五年本は、転写本ではあるが現在のところ唯一の完本であり、最終稿本と考えられている富岡本と比較されることが多い。

中村博保氏「目ひとつの神」研究^③では、文化五年本と富岡本の「目ひとつの神」が詳細に比較されている。中村氏は、両本の描写の違いについて、次のように述べている。

文化五年本にくらべて、この富岡本が完成されたかたちを示していることは疑う余地がない。(中略)富岡本の感情移入の要素を多くもりこんだ小説的描写にくらべると、桜本(桜山本)の描写は、対象に距離をおいて描き出す非共感的な、あるいはむしろ感情異化的な描写としての特質を示している。

中村氏は、富岡本・天理卷子本のテキストを「完成されたかたち」と評しながらも、文化五年本の描写に独自の「特質」を見出している。この他にも、野口武彦氏「夢の対話篇—春雨物語「目ひとつの神」の幻視界」^④などが、文化五年本「目ひとつの神」のテキストが持つ独自性について言及しており、文化五年本の「目ひとつの神」が、単なる過程稿とは言い切れない性質を持っていることが度々指摘されている。

『春雨物語』諸本に関する従来の定説と、中村氏や野口氏が指摘したような文化五年本が持つ独自の性質について、長島氏は前掲「解題」で次のように述べている。

通例の推敲の観念からすれば、分かりやすく語句が補強され、描写が豊かに肉付けされた富岡本が後のものとされるのは、当然のことではある。ゆえに、文化五年本が最終稿であるというのも、あるいはわずかな可能性の一つにとどまるかもしれないが、要は最終稿本探してはない。富岡本・天理卷子本が、著者が最後に書いた草稿であるため、最も優れた本文であるという思い込みを捨て、諸本が等価値で独自の本文であることを認識することが必要であり、実際に、文化五年本の本文は、富岡

本・天理卷子本とは異なった意味で、最も優れた本文である。先行研究では、複数存在する『春雨物語』のテキストのうち、最終稿本である富岡本のテキストが完成形とされることが多かった。しかし、長島氏が「解題」で述べている通り、各稿本が持つ独自の性質は、さらに探究される必要があるだろう。この長島氏の指摘を受けて、高田衛氏は「浮遊するテキスト『春雨草紙』」^⑤において、『春雨草紙』を『春雨物語』の単なる初稿と扱うのではなく、作品としての『春雨草紙』論を展開している。また、近年では、小椋嶺一氏「『春雨物語』「目ひとつの神」論」^⑥のように、文化五年本を最終稿本として選択する論文も現れている。

以上の先行研究をふまえて、本稿では、『春雨物語』諸本のうち、文化五年本に特に注目する。富岡本と文化五年本を読み比べながら、両本の描写の違いを確認し、特に大きな違いである結末部分と照らし合わせることで、文化五年本の「目ひとつの神」が持つ独自性について明らかにしていきたい。

それでは、文化五年本と富岡本の本文をそれぞれ示しつつ比較していく。以下、本文の引用にあたっては、文化五年本は桜山文庫本を底本とし、**文**とする^⑤。また、富岡本は富岡本を底本とし、**富**とする^⑥。比較する部分には傍線を付し、本文の対応を示すために文化五年本は丸数字、富岡本には黒丸数字で番号を振った。なお、対応する部分のない独自の本文については、対になる数字を使用しないことで表している。

次の文章は、都に向かう途中に野宿することになった若者が、老曾の森で怪異たちと邂逅する場面である。

文 老曾の森の木隠れ、こよひまくらもとめて深く入りて見たれば、**風**が折りたりともなくて、大木吹きたれしをふみ越えては、^①さすがに安からぬ思ひす。落葉、小枝、道をうづみて、^②泥田をわたりする如し。神の社たたせませす。軒こぼれ、御はしくづれて、昇るべくもあらず。すべて草たかく、苔むしたり。誰やどりし跡ならん、少しかき払ひたる所あり。枕はここに定む。おひし包袱ときおろして、^③心おちぬたり。風ふかかねば、物の音ふつに聞こえず。木末のひまにきらめく星の光に、あすのてけたのもし。露ひややかに心すみて、いといたうさむし。あやし、ここにくる人あり。背たかく、手に矛とりて、道分したるさま也。あとにつきて、修験が柿染の衣の肩むすび上げて、こんがう杖つき鳴らしたる。其のあとより、女房の、しろき小袖に、赤きはかまのすそ糊こはげに、はらはらと音してあゆむに、檜のつまで打ちたるあぶさかざしてくるを見れば、面

は狐也。其のあとより、ふつつかには見ゆれど、つきそひたるわらはめの、是もきつね也。社の前に立並びたり。矛とりしかん人が、中臣のをらび声して物申す。殿の戸荒らかにひらきて出づる神は、白髪おひたる中に、目ひとつありありと見ゆ。口は耳まで切りさきたる。鼻有りやなし。白き大うち着のぶ色にそみたるに、藤の無紋の袴、是は今さらしたるをめされたるに似たり。

富

関所あまたの過書文とりて、所々のとがめなく、近江の国に入りて、「あすは都に」と思ふ心すすみにや、宿とりまどひて、老曾の杜の木隠れ、こよひはここに、松がね枕もとめに、深く入りて見れば、風に折れたりともなくて、大樹の朽ちたふれしあり。ふみこえて、^④さすがに安からぬ思ひして、立ちわづらふ。落ち葉、小枝、道を埋みて、^⑤浅沼わたるに似て、衣のすそぬれぬれと悲し。

神の祠立たせませす。軒こぼれ、みはし崩れて、昇るべくもあらず。草たかく、苔むしたり。誰がよんべやどりし跡なる、すこしかき払ひたる処あり。枕はここに定む。おひし物おろして、^⑥心おちぬたれば、おそろしきは勝りぬ。高き木むらの、茂くおひたるひまより、さらさらしく星の光こそみれ、月はよひの間に、露ひややかなり。されど、「あすのてけたのもし」と独り言して、物うちしき、眠りにつかんとす。

あやし、ここにくる人あり。背たかく、手に矛とりて、道分したる猿田彦の神代さへおもほゆ。あとにつきて、修験の柿染めの衣、肩にむすび上げて、金剛杖つき鳴らしたり。その跡につきて、女房の、しろき小袖に、赤き袴のすそ糊こはげに、は

らはらとふみはららかにして歩む。檜のつまでの扇かざして、いとなつかしげなるつらを見れば、白き狐なり。そのあとに、わらは女の、ふつつかに見ゆる、これもきつねなり。

やしろの前に立ち並びて、矛とりし神人、中臣のをらび声高らかに、夜まだ深からねど、物のこたふるやうにて、**すざまし**。神殿の戸あららかに明け放ちて出づるを見れば、かしら髪面におひみだれて、目ひとつかかやき、口は耳の根まで切れたるに、鼻はありやなし。しろきうち着のにぶ色にそみたるに、藤色の無紋の袴、これは今調じたるに似たり。羽扇を右手に持ちて、歩みたるが、**恐ろし**。

野宿をすることになった若者は、寝所を求めて老曾の森の奥へと進む。すると、風が折った様子もないのに大木が倒れていた。若者は木を踏み越えて先へ進むが、やはり不安な思いである。文化五年本では、「**さすがに安からぬ思ひす**」(傍線部①)と若者の不安の心が語られるが、富岡本では「**さすがに安からぬ思ひして、立ちわづらふ**」(傍線部①)と、若者が進みかねている姿が描写されている。また、文化五年本では落葉や小枝に覆われた道を行くことを「泥田をわたりする如し」(傍線部②)と形容するだけであったが、富岡本では「浅沼わたるに似て、衣のすそぬれぬれと悲し」(傍線部②)と、移動するうちに濡れてしまった裾をわびしく感じる若者の心情も述べられている。まもなく若者は古い社を見つけ、その傍で野宿しようとして荷物をおろした。寝床を見つけた文化五年本の若者が「心おちみたり」(傍線部③)と落ち着いているのに対し、富岡本の若者は「心おちみれば、おそろしさは勝りぬ」(傍線部③)と、落ち着いたことでむしろ恐怖が増している様子である。そして、若者

が眠りにつこうとした時、どこから異形の一行がやって来る。一行が古びた社の前に並び、神人が祝詞を唱えあげると、社の戸が開いて目ひとつの神が姿を現した。文化五年本が状況を淡々と描写しているのに対して、富岡本では「**すざまし**」(傍線部④)や「**恐ろし**」(傍線部⑤)など、それを見た若者の恐怖が度々語られている。文化五年本と比較すると、富岡本の方が主人公である若者の感情について描写されることが多く、その時若者が何を感じているのが読者にわかりやすく示されているようである。

三

前節に引き続き、文化五年本と富岡本の比較を行っていく。次の文章は、宴席で目ひとつの神と僧に帰郷を促された若者が、それに応答する場面である。

文「若き者よ、都に物学ばんは、今より五百年のむかし也。(中略) 山ぶしのめぐみかむりて、あやうからず故郷にかへり、一人の母につかへよ」といふは、「**いかで委しく**」と問へば、打ち笑ひてこたへず。

富「いづれのみ心も同じく聞きしらせ給へば、都にはあすところざしたれど、上らじ。御しるべにつきて、文よみ歌学ばん。

小ゆるぎの蟹が目ざす道は、**栞得たり**」とて、よろこぶ。

目ひとつの神と僧は、若者に都の乱れについて説明する。そして、都へ行くよりも、故郷へ帰ってよい師を探すがよいと帰郷を促した。文化五年本の若者は、故郷に帰り母につかえよという僧の勧めに対して、どうか委しくと説明を求めている(傍線部⑥)。一

方、富岡本の若者は、小ゆるぎの漁夫にすぎぬ私も、志す道に道しるべを得ることが出来ましたと言い（傍線部⑥）、故郷に帰ることを決意している。前節では、描写の違いはあるものの、両本の若者の行動はほぼ同じであった。しかし、この場面の若者の反応は大きく異なっているようである。

この違いは、それぞれの物語の結末の違いに繋がっていく。次の文章は、先ほど引用した場面に続く、富岡本の場面である。酒宴が終わり、怪異の力によって若者は故郷に帰された。

富かはらけ、幾周りか巡らせたれば、「夜や明けん」と申す。神人も酔ひたるにや、矛とり直して、物まうしの声、皺ぶる人なれば、をかしと聞えたる。

山ぶし、「いざいとま賜はらん」と、金剛杖とりて、若き者に、「これに取りつけよ」といふ。神は、扇とり直して、「一目連がここにありて、むなしからんや」とて、わかき男を空にあふぎ上ぐる。猿とうさぎは、手打ちて笑ふわらふ。木末にいたりて、待ちとりて、山ぶしは飛び立つ。この男を腋にはさみで、飛びかけり行く。

法師は、「あの男よ、あの男よ」とて、笑ふ。袋とりて背におひ、ひくきあしだ履きて、ゆらめき立ちたるさま、絵に見知りたり。神人と僧とは人なり。人なれど、妖に交はりて魅せられず、人を魅せず、白髪づくまで齢はえたり。明けはなれて、森陰のおのがやどりにかへる。女房・わらははは、神人の、「ここに泊まれ」とて、いざなひ行く。

夜が明けるころ、宴会は終わりを迎える。若者は、目ひとつの神と修験者の力で故郷へと帰された。その後、富岡本では若者の去つ

た後の老曾の森の様子が描かれており（傍線部⑦）、物語の視点が別の人物へと移っていることがわかる。そして、これ以降の物語に若者が登場することはない。前の場面で、若者が「小ゆるぎの蟹が目ざす道は、栗得たり」（傍線部⑥）と決意したことで、富岡本の若者の物語はひとまず終結しているのである。

一方、文化五年本はどうだろうか。次の文章は、文化五年本の若者が故郷に帰される場面である。

文酒よきほどにすすみたり。「いざかへんなん」とて、袋打ちかづきいぬ。絵に見たるさま也。山ぶしも、「いざ」といふ。神は扇とりて、この若き男をあふぐあふぐ、空に上らせたり。山ぶしとりつたへて袖かづかせ、空行くほどに、此のあしたに母の前に落ち来たる。「いなや」と問へば、「水たまへ。おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」とて、ねやに入りたり。さ上るを猿と兎は手打ちてよろこぶ。このあやしき中に、僧とかな人は人也。

「いなや」と問へば、「^⑧水たまへ。おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」とて、ねやに入りたり。

文化五年本の若者もまた、目ひとつの神と修験者の力によって故郷に帰される。翌朝、家に着いた若者は「おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」（傍線部⑧）と母親に言い、寝室へ向かう。故郷に帰された後の若者の様子は、文化五年本でしか描かれていない。おそらく、若者はこの後に昨晚起きた出来事を母親に語るはずである。そこで初めて、目ひとつの神たちの話を聞いて若者が出した答えが明かされるのではないだろうか。また、文化五年本の物語の中

であり描かれてこなかった若者の感情も、そこでは語られているかもしれない。「おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」の一節があることよって、読者には物語が終わったあとの「物語」を想像する余地が生まれる。これまで語られてこなかった「物語」を、読者の想像力によって補うことが期待されているのである。

若者の感情の描写が多く、怪異との会話を通して若者が自らの道を決めるところまで描かれている富岡本の「目ひとつの神」は、物語として読みやすく、わかりやすい。先行研究において、富岡本が完成形とされてきたのも、この読みやすさ、わかりやすさが理由の一つだろう。一方、文化五年本は富岡本と比べると若者の描写が少なく、淡々と話が進んでいく。怪異と邂逅したことで、若者に起きたはずの感情の変化は、物語の中ではあまり描かれない。代わりに、終盤の「おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」(傍線部⑧)という若者の言葉によって、読者の想像にゆだねられる形になっている。この違いを意識しつつ、次節では、それぞれの結末部分を確認していきたい。

四

それでは、文化五年本と富岡本それぞれの結末を見てみよう。

文 乱れたる世は鬼も出でて人に交はり、人亦鬼に交はりておそれず。よく治まりては神も鬼もいづちにはひかくるる、跡なし。ふしぎなし。⑨ふしぎはあるべき物ながら、世しづかなればしるし無し。なき物とのみいふ博士たち、愚か也。⑩おのが心の西に東にと思ふままに行かるとも、ふしぎ也。文にたばか

られて無しといふは、無識の学士也。信ずべからず。

富 この夜の事は、神人が百年を生き延びて、日なみの手習ひしたるに、書きしるしたるがありき。墨くろく、すくすくしく、誰が見るともよく読むべき。文字のやつしは大かたにあやまりたり。おのれはよく書きたりとおもひしならぬ。

文化五年本の「目ひとつの神」は、物語の語り手の「ふしぎ」についての持論で終わる。乱れている世の中では、鬼さえも出てきて人に入り紛れ、人もまた鬼の中に紛れて怖がらないという。「ふしぎ」というのは、あるはずの物だけれども、世の中が穏やかならば、神も鬼もどこかにひそみ隠れるため、いたという痕跡は残らない(傍線部⑨)。それをわからずに、「ふしぎ」はないとばかり言う学者たちは愚かである。自分の心が、西に東にと思うままに行くことができぬのも、「ふしぎ」である(傍線部⑩)。「ふしぎ」が無いなどと言う見識のない学者は、信じてはいけない。このように、語り手が読者に直接呼びかけるような文章で文化五年本の物語は締めくくられる。富岡本を含めた他本では、一連の出来事が神人の書付によって後世に残され、語り手がそれを読んでいるという筋書きになつており、「ふしぎ」論による結びは文化五年本独自のものである。

語り手の言う「ふしぎ」という言葉が、作中の何を指すかについて、野口武彦氏は「夢の対話篇 春雨物語『目ひとつの神』の幻視界」⑪で次のように述べている。

この学識者なるものが、たとえば『胆大小心録』の第二十九条で、「学校のふところ親父、たま／＼にも門戸を出ずして、狐人を魅せずと定む。嗤ふべし／＼」と罵倒された中井履件の

ような人物であったことはいうまでもないが、それはさしあ
たつての問題ではない。気になるのは、結びに近い「おのが心
の西に東にと思ふまゝ、に行るゝも、ふしぎ也」という一文であ
る。自分の心が西にも東にも自在に往還できるのも世の不思議
の一つである、というふうにはそれは読める。だとすれば、これ
はとりもなおさず主人公の若者の体験のことでないか。

野口氏は、「おのが心の西に東にと思ふまゝに行かるるも、ふし
ぎ也」(傍線部⑩)という一文に着目し、「ふしぎ」とは相模の国か
ら老曾の森へやってきて怪異と邂逅する若者の体験のことだと解釈
している。若者の体験した出来事が「ふしぎ」であるという考えは
首肯できるが、作品中でどのように「ふしぎ」が表現されているの
かは、もう少し具体的に指摘する必要があるだろう。そこで、再度
文化五年本の「目ひとつの神」を引用し、「ふしぎ」と結びついて
いると思われる描写を確認していく。

次の文章は、宴に参加した若者に、目ひとつの神が声をかけた場
面である。

文「^⑪汝はあづまの者よ、志す事ありて宮古にとや、九重の内は
みだれみだれて鬼の行きかよへば、高きいやしきなく心すさま
じく、歌よくよまんとては林にかくれ野にやどる者のみぞ。と
くかへれ。東の道々も今日とときのふに改まりて、ゆききをなや
ます也。山伏の袖につつまれて、とくかへるぞよき」とて、御
めぐみの物がたりたふとし。

目ひとつの神は、若者の出身と志を言い当て、助言を与える。目
ひとつの神曰く、今の都は鬼の行き交うほど乱れているので、都の
人々の心は寒々としていて、歌を学ぶことはできない。そして、歌

が詠めるのは田舎に隠れ住んでいる者だけなので、早く故郷に帰る
ようにと若者を諭す。これ以前に、若者が自分の素性を怪異たちに
述べるくだりはないが、目ひとつの神は最初からそれを見抜いてい
るようである。目ひとつの神がいかにして若者の情報を得たかは、
僧の発言によって判明する。次の場面は、宴に遅れてやってきた僧
が、若者に話しかける場面である。

文「若き者よ、都に物学ばんは、今より五百年のむかし也。和歌
にをしへありといつわり、鞆のみだれさへ法ありとて、つたふ
るに弊ぬやぬやしきもとむる世なり。己歌よまんとならば、心
におもふまを囀りて遊べ。(中略)目一つの神の、まなこひ
とつをてらして海の内を見たまふに、すむ国なしとてこの森百
年ばかりこなたにとどまらせしを、時々とひ来て物がたりしな
ぐさむ。山ぶしのめぐみかうむりて、あやうからず故郷にかへ
り、^⑫一人の母につかえよ」

僧は、目ひとつの神と同じく、今の都の状態について若者に話
す。僧によると、都で歌を学ぶことができたのは、五百年も昔のこ
とであるという。今の都は風情が無く、騒々しくて汚らわしいもの
である。同じように感じた目ひとつの神は目を凝らして国内を見渡
してみたが、住むことができる土地は無かったという。そのため、
目ひとつの神は老曾の森に百年ほど留まっております。僧はそんな神を
慰めるために時々話をしに来ているらしい。最後に、僧は若者に早
く故郷に帰るように言うが、若者の「どうしてそんなに詳しく知っ
ているのですか」という問いには、笑って答えない。

僧の口から、目ひとつの神が千里眼のような力で国内を見ていた
ことが明かされる(傍線部⑫)。この発言は、富岡本には見られな

い、文化五年本独自の描写である。目ひとつの神は、老曾の森に居ながら、都や若者の様子を見ることができるのである。そして、それを語る僧もまた、目ひとつの神の言葉を補えるほど、都の様子に詳しい。特に、僧が最後に言った「一人の母につかえよ」(傍線部⑬)という言葉は、若者が都行きする前に母と交わした会話を知っているかのようなのである。僧は、目ひとつの神程の千里眼は持たないものの、言語に頼らずに物事を察することができると思われる。この神と僧の不思議な力には、文化五年本末尾の「おのが心の西に東にと思ふままに行かざるも、ふしぎ也」(傍線部⑩)という語り手の考えが反映されているのではないだろうか。文化五年本に登場する怪異たちは、語り手の考える「ふしぎ」を体現する存在なのである。

この「ふしぎ」の力は、目ひとつの神だけでなく、人間である僧も持っている。語り手は、人間もこの力を持つことができると考えているようである。では、人間も持つことが可能で、「おのが心の西に東にと思ふままに行かざる」力とは、いったい何を指すのか。これは、物語を想像する力、即ち想像力のことであると考える。語り手は、「ふしぎ」を理解しない想像力のない学者たちを批判するだけでなく、自ら「目ひとつの神」の物語を想像して読者にそれを追体験させることで、想像力がどのようなものを示しているのである。

六

以上に論じてきた物語の構造は、文化五年本の「目ひとつの神」

にどのような効果を生んでいるだろうか。読者は若者とともに「ふしぎ」と遭遇し、結末で初めてこの物語の語り手の「ふしぎ」論を聞くことになる。その「ふしぎ」論が登場人物の能力や行動に反映されていることに気づくか否かは、読者によって異なるだろう。第三節において、文化五年本の描写の乏しさを「読者の想像にゆだねられる形になっている」と表現した。文化五年本では、物語の前半や中盤では描かれてこなかった部分が、終盤の「おそろしき事物がたりして聞かせ申さん」という若者の言葉によって、物語の外で補足される仕組みになっている。その補足を行うのは、読者の想像力である。文化五年本の「目ひとつの神」の読者は、語り手の「ふしぎ」に関する訴えを聞き取り、物語の空白を自らの想像力で補う必要がある。つまり、文化五年本の「目ひとつの神」は、終盤の若者の行動と結末の語り手の主張によって読者に想像力を要求し、読者の手で物語が補われるという独自の構造を持っているのである。

【注】

- (1) 長島弘明「『春雨物語』の自筆本と転写本」(『秋成研究』東京大学出版会、平成十二年。初出『文学』、平成三年四月)
- (2) 長島弘明「解題」(『上田秋成全集 第八卷』中央公論社、平成五年)
- (3) 中村博保「『目ひとつの神』研究」(『上田秋成の研究』ペリカン社、平成十一年。初出『近世中期文学の諸問題』明善堂書店、昭和四十一年)
- (4) 野口武彦「夢の対話篇—春雨物語『目ひとつの神』の幻視界—」(『秋成幻戯』青土社、平成元年。初出『文学』昭和六十

三年五月)

- (5) 高田衛「浮遊するテキスト『春雨草紙』」(『秋成 小説史の研究』ペリかん社、平成二十六年。初出『論集近世文学5 共同研究 秋成とその時代』勉誠社、平成六年)
- (6) 小椋嶺一「『春雨物語』「目ひとつの神」論」(『秋成と宣長―近世文学思考論序説』翰林書房、平成十四年。初出『女子大国文』第一二五号、平成十一年六月)
- (7) 以下、文化五年本の「目ひとつの神」本文は、『春雨物語』(三弥井書店、平成二十四年)による。
- (8) 以下、富岡本の「目ひとつの神」本文は、『新潮日本古典集成(新装版) 春雨物語 書初機嫌海』(新潮社、平成二十六年)による。
- (9) 注(4)に同じ。

【付記】 本稿は、山口大学人文学部国語国文学会第四十四回研究発表会における同題の口頭発表に基づく。席上ご教示くださいました方々に御礼申しあげます。

(おおた・たかこ)